

# 日本文化研究と日本文明学とポーランドにおける日本文学研究

**MIKOŁAJ MELANOWICZ**

(ワルシャワ大学)

## 1 日本学の定義に関して一言

日本学 JAPANOLOGY は方法論上では文化と文明の定義とその区別によって二つの流れに区別できると思う。一般的に日本研究や日本学と言うと、伝統的な研究は文化論・文化学や文化人類学の分野に入る。日本コミュニティの生活範囲の内在的な精神的価値である真、善、美と哲学、宗教、芸術、言語、文学、歴史などの理想的な形が 19 世紀から日本研究の核となっているのである。そこで文化の性質に従って日本の特異性・特殊性の強調を探求しながら優れた業績をあげたに違いない。同じ時代にいわゆる有形の文化・物質文明の分野が多少研究されたが、伝統的な日本文化研究には含まれていなかったように思う。その範囲に入るか入らないかは日本語資料の使用の有無によるものであった。

日本文明学・比較文明学のコンセプトはヨーロッパ文明と日本文明の共通点を強調することで、日本の近代化の成功を理由付けるために日本「文明論」を梅棹氏が 20 世紀の 70 年代から唱えたようである。社会構造論に基づいて、システム論としての文明学を説いたのである<sup>1</sup>。生活領分の外殻をなす施設、組織、制度、機構の研究に重点をおいて研究分野として日本学に取り入れた結果、日本の政治、経済、科学、技術、法律なども日本学として研究されるようになった。現在のグローバリゼーションに最も影響されやすい日本の側面でもあるわけだ。

## 2 日本研究は文献学か東洋学か 日本研究のありかた

各国の日本研究の現状を見てみると、その歴史を振り返り、伝統の深さや浅さについて事実を並列したりすることが多く、研究や教育の分野、代表的な研究者などを紹介して、日本の描写やイメージが語られることがほとんどである。

また、いつこの大学で日本語を教え始めたかが取り上げられ、いつからいわゆ

---

<sup>1</sup> ミコワイ・メラノヴィッチ「文明学としての日本学の再認識—文明としての日本、文化研究としての日本研究」、『世界のなかの日本学』、東京、ペリかん社、2003、103-127 頁。

る「日本学」が科目として存在するのかを、時に応じて誇示することもある。日本関係の講座は、いわゆる文献学学部の組織に含まれることが多い。それは長い伝統のある古典研究（ギリシャ語学・文学とラテン語学・文学）から始まってフランス、ドイツ、イギリスなどを踏まえ、ご承知のとおり、異国主義的な地域の言語や文学を研究するようになった。ヨーロッパでは、トルコ、アラブ、中国などをはじめ、日本語はかなり後になってから大学講座となったといえる。

ポーランドの場合はどうだろうか。第一次大戦が終結し、ワルシャワは改めてポーランドの首都となり、ロシア官憲によって圧迫された大学の再建に力を尽くした。1919年に日本語講座が開設され、1939年までにポーランドの日本研究の基礎が出来上がり、ワルシャワ大学で学問分野として認められるようになった。それは、正式に PHILOLOGIE・FILOLOGIA 文献学の東洋学の一講座・専攻とされるようになった。

同様に、日本学科は 1987年にクラクフのヤギェウォ大学とポズナニのアダム・ミツキェヴィチ (ADAM MICKIEWICZ) 大学で開設された。これらの三つの日本学科は、文献学という衣装を着せられて設立されたが、これからどのように変化していくかは、まだはっきりしない状況である。しかし、この問題は後に触れることにして、根本的な諸問題に戻り、「日本学」というのは何か、基本的にどういう学問であるかということを考えてみたいと思う。

### 3 中国学から派生した日本学 日本研究の概略

2006年のワルシャワ国際会議（日文研のご協力を高く評価したい）においてポーランドにおける日本学の概略が発表されたので、ここではあえて繰り返さず、簡単に触れておきたい。その論文の著者 DR AGNIESZKA KOZYRA (A. コジラ) が日本に関する興味・好奇心のテーマを 19世紀後半まで遡り、事実を並べた。そうしてその好奇心がどのようにして日本研究・日本学へと至ったのか、その流れをうまく説明した<sup>2</sup>。

1945年から東洋研究所の中国学科において、W. KOTANSKI 先生が副専攻の一つ、中国学科のカリキュラムの一部として、日本語文法を教え始めた。先生は博士号を取得し、助教授になって、ワルシャワ大学における戦後の日本語研究の開拓者の役割を果たした。実際、ポーランドの日本学が著しい発展を遂げたのは 1960年代以降である。大学には文学、言語学、歴史学の三つの専攻が出来、修士課程のカリキュラムが作られ、それに合わせて国際交流も始まった。

---

2 Agnieszka Kozyra, Iwona Kordzińska-Nawrocka (ed.), *Beyond Borders: Japanese Studies in the 21st Century*. In *Memoriam Wiesław Kotański. Proceedings of International Conference Warsaw, May 2006*.

アグネス・コズイラ「ポーランドのワルシャワ大学における日本学研究」『日文研』33号、京都、2005

#### 4 国際交流のはじまり

1980年には東海大学と国際交流基金の協力を得て、中東欧で初の国際シンポジウムがワルシャワで開かれ、日本の識者以外にヨーロッパ日本研究の第一人者がワルシャワ大学に集まった。その後、日本語教育開始75周年を記念した国際シンポジウム(1994年11月)、ヨーロッパ日本学協会(EAJS)の国際会議がワルシャワで開かれ(2004年8月)、また、成功に終わった前述の2006年の会議も、日本学分野の国際活動や交流の発展を示している。

#### 5 ポーランドにおける日本文学—文学研究の基礎は翻訳である

ポーランドの日本研究の範囲はそれほど広くはないが、宗教学はかなり進んでいるといえる。最近注目すべきは禅の哲学の研究<sup>3</sup>、ならびに日本語の言語学である<sup>4</sup>。

日本文学研究の状況<sup>5</sup>を具体化するために、まず個人的な考察から始めたいと思う。

#### 6 個人的な体験：宮沢賢治、萩原朔太郎、夏目漱石、谷崎潤一郎、安部公房、大江健三郎

私はまず60年代には宮沢賢治の「春と修羅」を翻訳、解釈し、彷徨える孤独の象徴としての阿修羅のイメージを思い浮かべ、日本文学にあらわれた孤独を分析していた。また日本人の象徴生活を代表する松竹梅、富士山などを萩原朔太郎の詩と詩論を通して眺めるようになった。その上で近代化される日本と日本人の絶望の表現をまずこの二人の詩人の作品において発見し、その現象の意味を理解しようとした。救済への道を農業などの近代化に発見し、仏教の思想も見られた宮沢賢治のイメージと、精神的な挫折感に打ちひしがれた、怠惰無能な、憂鬱な、孤独な人間のイメージをもう一人の詩人、萩原朔太郎の「月に吠える」や「青猫」に見たのである<sup>6</sup>。絶望的といわれる状況や運命から逃走しようとして救いを求めるこの二人の詩人を知った後で、70年代に夏目漱石の「こころ」などを翻訳することになった。

3 Agnieszka Kozyra, *Filozofia zen* (禅の哲学), 2004; pp.411; *Filozofia nicości Nishidy Kitarō* (西田幾多郎の無の哲学), 2007, p.286.

4 Romuald Huszcza et. al, *Gramatyka japońska* (日本語文法), 2 vols., 2003, pp. I vol.542, II vol. 618; *Honoryfikatywność Gramatyka Pragmatyka Typologia* (敬称・文法・語用論・類型学), 2006, pp. 228.

5 M. Melanowicz, 「ポーランドにおける日本文学翻訳と研究」、『文学』1974年、5月号、102-106頁。M. Melanowicz, 「ポーランド語になった日本文学」、『国際交流』1980、25、26-33頁。M. Melanowicz, 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」、『日研』1991。

6 M. Melanowicz, 「漂泊者萩原朔太郎」、『国際日本文学研究集會会誌録』国文学研究資料館1993、239-251頁。M. Melanowicz, 「古井由吉・古山高麗雄の小説の主人公」、『国際日本文学研究集會会誌録』、国文学研究資料館、1983、179-190頁。

やはり漱石の主人公たちも、あのすばらしく近代化される日本では落ち着く場所を見つけることが出来ない。主人公は孤独である。悩む。そして救いを求める。が、その努力は失敗に終わる。「こころ」の主人公は自殺する。いうまでもなく、以上の三人の作品はどれもすぐれた代表的な文学作品であり、それぞれの作者が異なった運命を辿ったにもかかわらず、似たような精神状態を描写、あるいはそのような状態を示唆したと思われる。すべてが苦しく、時には絶望的な状況におかれた人間のイメージを代表するのである。日常生活にあまり現れないこころの悩み・痛み、闇の世界を暴露した文学の流れである。そういう日本人の心を知るようになったのである。その作者のうち、宮沢賢治はすでに神話化されており、萩原朔太郎は20世紀の日本語・口語を詩の表現手段にしたのであるが、まだ前橋市以外では伝説化されていないようである。夏目漱石はどうかというと、国民作家となり、神聖なる領域に入ったようである。夏目漱石と宮沢賢治と萩原朔太郎は日本人の実生活の苦悩を表現して20世紀の真の美を追求していたのである。激しく変化する日本では消えることがない、社会の、人間の深い内面に絶えず流れている何かを掴もうとしたのである。したがって、20世紀の日本の象徴であるといえよう。

このように、宮沢賢治についての卒業論文（1959年）の時点から、私が20世紀の60年代以来世紀末まで日本文学研究や翻訳をしてきたのは、主に最も代表的な純文学の作品であった。ポーランドでは川端康成がノーベル賞を受賞した機に乗じて優れた小説の翻訳が出版されるようになった。最も人気があったのは安部公房の「砂の女」<sup>7</sup>、谷崎潤一郎の「芦刈」「春琴抄」<sup>8</sup>、夏目漱石の「こころ」のほかに「吾輩は猫である」、遠藤周作の「沈黙」、「侍」、「深い河」、川端康成などである。三島由紀夫も有名になった。少し遅れて日本文学の小ブームに加わったのは大江健三郎である<sup>9</sup>。

## 7 村上春樹だけの時代

現在よく読まれる村上春樹の作品紹介は1995年代から始まったが、春樹の人気が出てきたのは今世紀になってからである。日本のアニメやマンガも高校生の間で人

7 M. Melanowicz, 「砂の女を再読して」、『すばる』6、1993。M. Melanowicz, 「言葉の革命。日本のアヴァンギャルド文学の意義と可能性。安部公房の死をいたんで」、『日本研究 京都会議』Ⅲ、日文研、1994、101-105頁。M. Melanowicz, 「安部公房—痛んだ文明のアレゴリイとアンチ・ユトピア—『密会』主として『カンガルー・ノート』のばあい」、『国文学解釈と教材の研究』42-9、学燈社、1997、8-11頁。M. Melanowicz, 「文学の役割と可能性、その破綻と救済のイメージ—安部公房と大江健三郎を中心に」、In: “Annals of the Institute for Research in Humanities and Social Science”, No. 9, 2000. Miyagi Gakuin Women’s College, Sendai, 2000, pp. 23-30.

8 M. Melanowicz, 「吉野葛」—伝説が現在に及ぼす影響についての物語」、谷崎潤一郎国際シンポジウム、中央公論社、1997、60-66頁。

9 M. Melanowicz, 大江健三郎『万延元年のフットボール』の翻訳、『群像』、1995、4、87-89頁

気があり、日本に特別な興味を持たない一般の人々の間でも流行っている。村上作品の翻訳はすでに7冊出版され（A. Zielinska-Elliott）、ブームを巻き起こしている。評論家の間でも好評で、「ねじまき鳥クロニクル」に感激したという人が多い。「村上のいない世界は考えられない」と言ったようなことも書かれている<sup>10</sup>。

いうまでもないが、ポーランド語へ翻訳したのは、日本学科の卒業生である。それは日本語教育をはじめ、日本学の重要性を証明している。

以上触れたように、作家の小説の翻訳だけではなく、作家研究もされている。現在は村上春樹作品について博士論文が書かれている。以前、日本作家について、さまざまな論文や小論が発表され、文学史と論考の3巻の本が出版された。これまで唯一単行本で出版された作家論は「谷崎潤一郎と伝統」である。雑誌に掲載された研究論文は宮沢賢治、萩原朔太郎、夏目漱石、安部公房、大江健三郎、開高健、芥川龍之介、川端康成、小林多喜二、古井由吉、黒井千次、井上靖、唐十郎、矢代静一、三島由紀夫などである。いうまでもなく、以上の作家は純文学者である<sup>11</sup>。

最近私は、純文学の作家の研究だけではなく、大衆作家にも目を向け、とくに向田邦子作品を読んで、放送文化と関わる作家の研究をする必要があると思うようになった。向田邦子の家庭ドラマを調べた後で、現在は山田太一研究にも携わっている。日本現代大衆文化の形成に関し、数多くの戯曲作家やシナリオライターについて研究する予定である。

## 8 新しい分野の一例

もう一つ興味の出してきた分野は、日本の市民社会の動きをよく示している文化的現象であり、グローバリゼーションに対する地方文化の声・GRASS ROOTの動きである。それは市民ミュージカルである。一種の市民運動といってもいい。その現象はまだ十分に調査していないが、これまでにわかったことについて少々述べてみたい。

バブル経済が崩壊し、90年代に入った頃、新しい現象が生まれつつあった。その一つとして市民ミュージカルという運動があげられる。始まったのはおそらく1993年前後で、埼玉の川越で「だから、いま」というタイトルで、「I LOVE 憲法」というシリーズが始まった。第1回の作品が取り上げた問題は、従軍慰安婦や教育問題や労働であった。1994年には「自分が自分であることをよこび、自分が自分でなくなることを恐れます」というミュージカルで、その芝居を通じて実際に起きた医療問題などの事実をく追体験し、それを憲法の視点から見つめなおしてみるとい

10 アンナ・ジェリンスカ・エリオット、『A Wild Haruki Chase 世界は村上春樹をどう読むか』、文芸春秋、208頁。

11 例外として参照 M. Melanowicz, 「琉球の風—文学と歴史」、『世界に開く沖縄研究』、第4回沖縄研究国際シンポジウム実行委員会、2003、283-290頁。

う作業を行った。

第3回目(1995年)の「ボクたちの昭和70年」には原爆投下50年、水俣病などを取りあげ、1996年には「わが町 わが島 仮の町 仮の島」で阪神大震災と沖縄がテーマであった。

松本サリン事件とマスコミをあつかったのは1997年の第5回目の「カミングホーム」であった。1998年には「ムツゴロウのラプソディ」で諫早湾の生き物の運命を通して環境問題を訴え、1999年には「アルカディア」で人間と自然の調和、農業やダイオキシンの問題などを扱った。2000年の「裸の王様 日本」は21世紀を前に変わるもの、変わらないものを考えさせられた。少年の目には日本憲法がどうみえるのだろうか。

これらは「I LOVE 憲法」という「憲法ミュージカル」のシリーズになった。2002年には田中暢が栃木(下野の国)で生まれた円仁(平安前期の僧)について「音楽劇円仁」という作品の脚本を書き、演出をした。以上のミュージカルは百人のプロとアマチュアによって作られたのであった。市民参加とプロとアマの出会いは演出家にとって難しい課題だった。演出家と脚本家の田中のぶや振り付けの石橋寿恵子、作曲の MATSUNOBU などは素人芝居におわらせず、高いレベルを創造しようとしたのである。それが成功をもたらした。

私が2006(平成18)年9月にリハーサル(本番は12月であった)を見たのはやはり田中氏の脚本と演出の「心に太陽を持って」である。それは栃木市制施行70周年記念ミュージカルで原作の山本有三の小説「路傍の石」を素材に、子供たちに大きな夢と希望を与え、たくましく生きてほしいとの願いからミュージカル化を企画、百人の市民が創る吾一の物語であり、有三の心を未来へつなぐものであった<sup>12</sup>。今年の「キジムナ」(沖縄の樹木に棲む妖怪、妖精)は、田中暢が演出、音楽は「心に太陽を持って」と同じ Matsunobu という作曲家である。

## 9 悪魔の飽食と全国横断コンサートの意義

地方の文化的活動を全国とつないだのは、組曲・カンタータ「悪魔の飽食」と「正義の基準」を歌った全国合唱団である<sup>13</sup>。ご存知の通り、作家森村誠一が1983年に発表したドキュメント小説に基づいた合唱組曲「悪魔の飽食」が出来た。<731部隊>を取り上げた極限状況を歌う作品である。戦争に対する痛烈な告発である組曲の音楽を創ったのは池辺晋一郎である。1984年に神戸で生まれたこの音楽作品は、

12 「心に太陽を持って」のびらから、栃木文化会館、CD Matsunobu 1/100 Music Art. Garage [2006]; I LOVE 憲法 1993-2002、埼玉憲法フェスティバル実行委員会。

13 第18全国横断コンサート神奈川講演、カンタータ「悪魔の飽食」、横浜みなとみらいホール大ホール。CD: 神奈川フィルハーモニー管絃楽団 悪魔の飽食をうたう神奈川講演合唱団・同全国合唱団

1995年から全国横断コンサートを開始した。18都道府県での演奏はどこでも満席だった。開催する地で市民合唱団を組織し、練習を重ねていく。本番では以前に開催した全国各地の合唱団が加わり、ボランティアで参加する市民運動になったとのことで、興味深い。その間、中国公演も2回行った。作曲家の池辺指揮、森村名誉団長で今年の7月24日にポーランド、26日にチェコでも公演された。

以上のような、日本現代文化生活にはメディアに取り上げられていない、重要な現象が潜んでいる。現代生活にわだかまっている問題を理解しようとした市民ミュージカルや、隠された日本の歴史のなかに忘れかけた人間の悪<731部隊>を暴露しつつ、このようなことが再び起こらないように訴えた「悪魔の飽食」のような作品が、他にもあるに違いない。以上のような、市民を動かす力はどこから来るのだろうか。その現象を研究すれば日本の真の姿を知るのに役に立つのではないかと思う。大衆文化のグローバリゼーションに対して反流をなすのである。